

〔甲子夜話 七十七〕文化二三年頃、京都嵯峨ノアタリニ、雀ノ如キ小鳥者コノ鳥何鳥ナルヤ見ル者ソノ名ヲ辨セズト、數萬群ヲナシ來リ、晝間ハ處々ヲ飛回リ、夜ハ篋中ニ宿スルニ、竹偃テ地ニツキタリト、カ、ル故ニ林叢モコノ鳥ノタメニ枯荒セリ、去レドモ其歲飢餓ノコトナカリシカバ、里人豐年鳥ト呼シト、京右師相國寺中光源院ノ當住、十六七年前鎌倉ニテ印宗ニ語、

〔視聽草 初集九〕異鳥。

日暮里村百姓年寄 段右衛門

文化十年西五月十四日之夜、構之内ニ而さし取候鳥、

一頭、鷺之首之如く、鶺鴒に似たり、脊もろこし餅之色也、腹は白く鼠色之所もあり、足長く壹尺程も有之、啼事高く響大造なる聲にて、遠方へ聞へ、ごうくと七聲程宛鳴、又は折々ボコ／＼といふ様成聲も有之、右さしとり候得ども、餌飼之儀相知れ兼候故、同村御旗奉行天野大和守殿屋敷守り仕候者已前鳥商賣いたし候由承り候故、右之者へ餌飼之儀相頼候處、種々工夫いたし、何れ生餌にて可育といろく、川魚杯あたへ候所、とかく鮎のみ食し申候。

右之鳥、御鳥見を御上へ上り申候、サカカ 戮罕、スイコ 水蒭蘆にても可有之哉との事に候。

〔甲子夜話 五十一〕信州飯島ト云所ニテ、土人異鳥ヲ捕得タリ、大サ小鴨ホドアリ、人寄り合テ食セントテ料理シ、有合タル大鍋ニテ煮タルトキ、熟スルニ從テ其肉夥クフエ、鍋ノ蓋ヲ内ヨリ持擧グ、是ヲ見ル者懼テ食スル意ナク、ソノ邊ノ小川ニ弃タリ、翌日見レバソノ川ノ下流マデ大小ノ魚悉ク死シテ浮シトゾ、此鳥モシクハ鳩ナラン歟トノ説ナリ、堀和州飯田侯話